

公益社団法人日本クラフトデザイン協会

事業評価委員会 議事録（親と子のふれあい交流活動）

日 時：平成26年3月8日（土） 15:00～17:00

※第2回定例理事会の議題として審議された

場 所：酪農会館会議室B （東京都渋谷区代々木 1-37-20）

出席者：（理事）岡本昌子 相川繁隆 水野誠子 磯谷晴弘 海野えり子 菅野靖

栗原くみこ 西川雅典 林範親

（監事）露木清勝 堀内雅博

●実施内容について

- ・担当理事から事業について報告がなされた。

今年度は「自然」をテーマとし、夏期は木工、冬期はテキスタイルのワークショップを実施した。自然・風土とそこで暮らす人々の工夫や知恵から生まれたクラフト文化をワークショップとセミナーを通じて感じてもらうことを目的とした。

■夏期：「木の枝や木片で作るキーハンガー 自然のカタチ」

実施日：平成25年8月26日（月）

会 場：新丸ビル10F「エコッツェリア」

参加人数：午前の部 8組 午後の部 8組 延べ34名

■冬期：「たて糸とよこ糸で織物アート」

実施日平成26年1月12日（日）

会 場：インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター

ミッドタウン・タワー5F

参加人数：午前の部 10組 午後の部 11組 延べ40名

■第53回日本クラフト展に於ける広報展示

平成26年1月8日（水）～16日（木）

会 場：東京ミッドタウン・デザインハブ 第53回日本クラフト展会場

- ・夏期、冬期のワークショップ共に参加者に配布するためのテキストの作成を行った。内容は扱う素材の歴史や技法等図版を交えて作成した。テキストは参加者以外にも関係機関などに送付した。事業実施後も親子の話題を継続させるツールとして有効であった。
- ・参加者が目標の人数に達しなかった。広報等に問題がないか検証が必要。

以下、各項目の担当理事からの報告と評価委員の意見等

●事業実施の準備体制について

- ・実行の準備と実施については会員による実行委員会を組織し行った
- ・委員会は計6回開催し、テーマの設定から具体的準備まで詳細を詰めることができた
～会員の積極的な協力を得られたことは評価できる。個々のプログラムの具体的な準備は適格に進められたと思うが、広報や企画の全体感について、もっと検討する時間を持つと良かったのではないか

●告知・募集の方法について

- ・夏期はエコキッズのプログラムとして開催し、先方の持っているネットワークに依るところが大きかった。冬期は募集チラシを作成、HPやメールマガジンで広報を行った
- ・特に今年は参加費を徴収することを理由に教育関係機関の協力を得られなかった
～広報手段としては基本的なところは押さえているが、ニーズのあるところに情報がきちんと行き届いているかの検証が必要
最低限の参加費（材料費）を徴収することが認められないのは、先方の規則の問題もあるものと思う。現在は民間企業も含め無償でワークショップを実施している例も少なくない。次年度は早期に具体的プログラムをまとめ教育機関と交渉する必要がある。材料費を無料にすれば、全て解決する事かどうか不明である

●実施内容について

- ・夏冬、共通テーマの元、素材をかえて実施した。どちらも参加者の関心は高く、適切な設定であったと考える
- ・全体の時間配分は概ね良かったと思うが、制作の時間をもう少し長くできるとさらに良かった
～時間配分に関して、必ずしもこれまでのスタイルを踏襲する必要はない。しかしながら制作の時間を単に長くするのではなく、その中で細かな制作段階での子供たちの行動の予想を立てて行う必要がある

●今後の展開について

- ・今後も素材を変えて魅力を発信していくことが望ましい。また同素材でも工法等の違いを活かし様々な展開が可能である。
- ・これまで蓄積してきたノウハウを地方での企画展示等の併催事業に組み込めると良いと感じる
～地方での実施の検討は是非、すすめてほしい。このプログラムは都会の親子を想定している。地方は地方の状況があるので、そこを鑑み展開をしてほしい

●目的の達成について

- ・夏、冬共に参加人数は目標を下回った。事前広報の方法が要因の一つと考えられる。更に早期に取り組み、改善していきたい。
- ・参加者の満足度は高く、本事業を通じてクラフトに親しみ、またそれをきっかけに親子の対話を深めていく目的は達成されたものとする。
- ・広報展示を一日平均 860 人が訪れた日本クラフト展に展示したことは非常に大きな効果があった。また、冬期の会場はクラフト展会場からも様子をうかがうことができ、二事業の結びつきにつながる期待を感じた。
- ・セミナーとワークショップの組み合わせについても、数年このスタイルで実施しているので、一度精査が必要である。ワークショップの切り口、感じてもらいたいことへの誘導の工夫が今後の課題である

以上